様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３５０７３５

研究課題名（和文）生活体育論争としての佐々木－瀬畑論争の再解釈に関わる実証的研究

研究課題名（英文）Empirical study on reinterpretation of Sasaki-Sebata dispute as that of life physical education

研究代表者
石田　智巳（ISHIDA, Tomomi）

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：９０３１４７１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：戦後の生活体育には二つの立場があり，それは1960年に佐々木－瀬畑論争となって表面化した。しかし，この論争は実証的な研究の俎上に載せられていない。そこで，本研究ではこの論争を生活体育論争として再解釈することを目的とした。具体的には，1）佐々木－瀬畑論争にいたる両者の理論的，実践的動向を探り，2）この論争を「体育科教育本質論争」に位置づける試みを行った。
その結果，この論争はしばしば言われている「からだづくり論」と「運動文化論」の対立や論争ではなく，両者は生活体育の考え方にたっていたことを明らかにした。そして論争の論点はその後の二つの立場へ大きく影響を与えたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：There were two standing points in “life physical education(seikatsu taiiku)” in the postwar period, which in 1960 appeared as the dispute between Kentaro Sasaki and Shiro Sebata. It is so called “Sasaki-Sebata dispute”. However, this dispute has not been subject to empirical research until now. Therefore, in this research, I aimed to reinterpret this dispute as that of “life physical education”. Specifically, 1) explored the theoretical and practical trends of both Sasaki and Sebata, and 2) made an attempt to position this dispute in a " the dispute on the essence of physical education".
As a result, the following were clarified. The dispute was not done in two different standing positions between " theory of body-mind creation(karadazukuri-ron)" and "movement culture theory (undobunka-ron)" which has been often said by some researchers, but was done in the range of “life physical education. And some issues of this dispute made various impacts on the subsequent two positions.

研究分野：体育科教育学

キーワード：生活体育　佐々木－瀬畑論争　体育科教育本質論争　運動文化論　からだづくり論

１．研究開始当初の背景

戦後の「生活体育」には大きく分けると二つの立場があった。一つは，子どもの運動生活を豊かにするために，子どものスポーツや遊びを授業で取り上げて指導して生活に返すという立場である。この代表的な立場は，丹下保夫や前川峯雄である。もう一つは，子どものからだのおかしさが，社会やそこでの生活に起因するものととらえ，「からだづくり」を主張する立場である。そこでは，生活をとらえるために，体育授業にも「書く」という方法が適用されて，子どもの認識を重視した実践が行われた。これらには，和歌山県の佐々木賢太郎による体育実践とその成果が大きな役割を果たした。

この二つの生活体育を標榜する立場が，論争という形で対峙することとなったのが，いわゆる佐々木－瀬畑論争である。この論争は，戦後の体育界における初の実践論争という位置づけにある。論争については，出原，内海，荒木，岩田，梅野らが言及している（釜崎，2007）。しかしながら，佐々木や紀南作文教育研究会（以下，紀南作教）のその時点での問題意識や実践の特徴，あるいは，瀬畑や丹下ら学校体育研究同志会（以下，体育同志会）のその時点での問題意識にまで踏み込むことなく，論争を解釈しようとしている。つまり，実証的な研究はなされてない。

たとえば，佐々木（1960）は，「発見－照合－確認－照合」という「認識の節」を大切にしていると実践報告の冒頭で述べている。しかし，この「認識の節」については，岩田（1997）が言及しているだけで，それがいかなる経緯で登場するのか，さらにその意味内容や意義を主題化した研究はない。

このことが重要になるのは，体育同志会もこの頃に体育における「認識」について語り始めるのであるが，その経緯が明らかになっていないからである。

このように，両者の歩みが実証的に明らかにされていないまま，論争が語れているところに一つの問題があると考えている。もう一つの問題点は，これまでの研究が，論争当時の立場や主張の違いを言い募るあまり，その後に両者に及ぼした影響について語っていない点が挙げられる。例えば，佐々木自身は，「からだづくり」という基本姿勢を崩さないままではあるが，「運動文化を追求する」という考え方に学んだと述べている（佐々木，1994）し，そういった実践も散見される（佐々木，1984）。一方，「泣いたおもちゃん」（伊藤，1960）に代表されるように，「苦手な子どもを大切にする」だとか，子どもの認識を大切にするというのは，体育同志会の論争の後の主張でもある。それは，佐々木や生活綴方を用いた体育の影響と言えなくもないが，それについても明らかになっていない。

２．研究の目的

筆者はこれまで，佐々木の体育教育思想の形成過程に関わった実証的な研究を進めてきた。例を挙げれば，佐々木が生活綴方を志す理由（石田，2005），「生命を守る体育」の主張の経緯と意味（石田，2006），『体育の子』（1956）時代の子どもの認識形成に関わった理論と実践の変化や「生活体育」の意味（石田，2011）などである。本研究は，これらを引き継ぐ研究である。

本研究では，次の課題を設定し，それらを明らかにすることを目的とした。

① 体育と認識に関わる課題

1957年4月より佐々木が赴任した朝来中学校や南部中学校での実践記録を中心に，佐々木の実践や理論の変容過程を浮かび上がらせる。その際に，佐々木－瀬畑論争の発端となる佐々木の実践記録に表れた「認識の節」，すなわち，「発見－照合－確認－創造」が出てくる経緯と意味を明らかにする。また，すでに述べたように，丹下，瀬畑ほか（1960）では，体育における認識について語られている。そこで，その当時の体育同志会における認識の議論の起こりと実践の諸相について当時の文献をもとに明らかにする。

② 生活体育論争として位置づける課題

佐々木－瀬畑論争は，『体育の科学』誌上で行われた論争だというのが定説である。しかしながら，誌上での論争の合間に，『生活教育』誌上でも，佐々木（1961）の提案に対して，川口ほか（1961）が座談会で検討を行っている。これは，佐々木－瀬畑論争を契機としつつも，丹下と瀬畑ほか（1960）の共同研究に対して，体育の本質に関わる「提案」だと読むことができよう。また，内海（1984）が指摘していることであるが，丹下（1964）は，「戦後体育科教育学論争」を執筆しているが，そこに佐々木－瀬畑論争への言及は全くない。そこで，この論争を二つの生活体育が交差したという視点から，論争の時間も空間も広げた形で位置づけし直す試みを行う。

３．研究の方法

本研究は，基本的に歴史実証的に行われる。そのため，これらの課題は，ひとまず関連の施設（図書館，教職員組合，国会図書館，丹下文庫などにおいて）文献の収集とその精査を行う。その過程で，不足しているものや不明な点については，それぞれの関係者への聞き取りを行うこととする。

4. 研究成果

その結果として，以下のことを明らかにした。ただし，今後の論文化に向けて，概略にとどめておきたい。

まずは，佐々木が体育と「認識」についてどう発展させたのかについて。これについては，1959 年に語られる「認識の節」の起こりについて，以下の通りに明らかにした。

１）佐々木は，すでに 1953 年頃から子ど

もの認識を高める指導を行っており，「認識の節」は，その延長線上に位置付いていること。2）また，集団づくりを志向していたため，当時流行っていたグループ学習批判と結びついていたこと。3）当初は生活指導との関わりで認識指導を行っていたが，それを1959年頃からは，教科指導の方法として用いようとしたこと，そしてその教科とは体育・保健体育であり，『体育の新しい授業』（明治図書，1959）に著されていること。4）1958年は勤務評定闘争が行われ，その闘争に敗北した紀南作文教育研究会が，新たな基軸をつくるべく 1959 年に行われた研究会で提案されたこと。5）それゆえ，文部行政批判を含んでいたこと,などである。

次に体育同志会の認識の議論について。体育同志会の主要なメンバーであった中村は，1959年に「効果的な指導法への疑問」という論文を残している。この論文では，体育同志会が「ソースヴォリウム」という資料を使って技術指導とグループ学習を統一的に捉えようとしていたことへ言及している。しかし，むしろ，この指導法には子どもの認識を問題にしていないと否定的に捉えていた。それが，1960 年 2 月の海後勝雄論文を経て，同年 10 月の梅根他論文へとつながっていくのである。ここで丹下（文責）は，梅根，海後に学んで体育と認識についての考え方を記述している。海後の影響についてはこれまでも語られてきた（高津，2004）が，梅根の影響については今回初めて明らかにすることができた。従って，梅根他（1960）論文では，瀬畑も含めて 4 人の筆者が体育と認識について述べたことになる。

次に，生活体育論争として位置づける課題について。

これについては，もう少し精査が必要ではあるため，現時点では次のことを指摘しておくにとどめたい。佐々木－瀬畑論争は，体育科の本質を「からだづくり」におく教科研・身体と教育部会と，「運動文化の継承・発展」とする体育同志会の「両団体を代表するかたちで争われた」（内海，1984）とされている。佐々木がむしろ教科研を代表しているというよりは，紀南作教に学んだとすべきだという指摘は，すでに石田（2005）が行っている。そして，体育同志会が「運動文化の継承・発展」という体育論を提出するのは，少なくとも 1960 年の夏以降，あるいは 1961 年のことである（丹下，1961）。そのため，この論争を実践論争として位置づける際に，上のような単純な図式で論争を語ることには慎重でなければならない。とりわけ，体育同志会は 1960 年に「理論的な飛躍」（高津，2004）を遂げるにせよ，それはあくまでも理論が先行していたのであり，実践化は同年の秋以降に俟たなければならなかった。そして，瀬畑（1961）が，論争の最後に，「以上私が書いたことは，私一人の考えでなく，学校体育研究同志会や目黒一中の仲間と話し合ったことをまとめたものです。また佐々木氏とも紀南作文の会とも今後の国民教育や教育の自主編成を守り育てるために」と述べているように，この論争は，おそらくある時点から，教科研というよりは紀南作教を代表する佐々木だという認識が瀬畑にはあったと思われる。それ故に，この論争を教科研・身体と教育部会と体育同志会を代表して行われたとするのは誤りである。そして，論争相手の所属への認識の変化が，この論争をうまく位置づけることができなかったのではないかと思われる。

さらにこれについては，正木（1975）が言及しているように，もともと「戦後体育科教育学論争」とは，1964 年に丹下保夫が『現代教育科学』に執筆した内容がベースとなっている。それについて，正木（1975）は『丹下の思い』が強く出ていると述べているように，一人の目で構成された論争であった。そして，まさに丹下が執筆した戦後体育科教育学論争を含めた，戦後体育に関わる諸論文を集めて編纂されたものが『戦後民主体育の展開』理論編と実践編である。もちろん，これもある意図で編集されているため，全ての論文が網羅されているわけではない。そして，この本は論文集であるので，それをどのように読み取るのかが必要になる。佐々木－瀬畑論争を 1960 年～1961 年に掛けて行われた論争と狭く捉える限り，この論争そのものや戦後の体育科教育学論争に位置づけることは容易ではない。少なくとも，戦後体育科教育論争を，正木・木村・中森らが，共同執筆「生活体育を検討する」（1958）において，丹下等の生活体育を批判したことから始まり，そして，1963 年に行われた全国民間体育研究合同集会にまでスパンを広げる必要がある。正木（1975）は，佐々木－瀬畑論争がこの集会を開催するきっかけとなったと述べている。それは，まさに「民主体育」という旗印のもとに，大同団結するという意味においてであった。

そして，体育同志会が 1960 年に生活体育という枠組みを保ちつつも，運動技術の指導に目を向けたように，教科研もまたその立場を変化させていく。つまり，1961 年には教科研でも，生活綴方的教育方法を用いた教科固有の方法を探るような方針転換が起こった。そして，身体と教育部会でも，動作のつなぎ・調合という形で，教材そのものを子どものからだの観点から見直す動きも出て来た。さらに，体育同志会でも，認識の議論を正面に据えて実践研究に取り組むようになる。それはまさに，両団体のお互いへの影響という側面と，教育界全体の方針転換に従っている側面も見られるのである。つまり，両団体を見ても，1963 年ごろには，1960 年の論争が始まるころとはずいぶんと違った主張を行っているといえるのである。

詳細は，学術論文で報告予定である。

＜主要引用文献＞
（1）佐々木賢太郎（1960）「バスケットボール（中学１年）－ドリブル学習－」,『体育の科学』10（8），pp.427-430
（2）佐々木賢太郎ほか（1959）『体育の新しい授業』，明治図書
（3）瀬畑四郎（1960）「私のバスケットボールの実践から」,『体育の科学』，10（10），pp.558-561
（4）内海和雄（1984）体育科の学力と目標，青木書店，p.190
（5）石田智巳（2011）「佐々木賢太郎の体育教育思想形成に関する研究：『体育の子』時代の生活綴方と子どもの認識形成に関わって」,『体育学研究』第 56 巻第 2 号, pp.435-449
（6）正木健雄（1975）「解説」，城丸ほか編，『戦後民主体育の展開　理論編』，新評論，pp.335-347
（7）高津勝（2004）「生活体育論から運動文化論へ」，体育同志会編『体育実践とヒューマニズム』，pp.45-70

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）
① 石田　智巳, 体育科における『深い学び』とは, 学校教育, 査読無, №1200, 2017, pp.6-13
② 石田　智巳,「資質・能力」論が体育授業にもたらす影響，体育科教育，査読無，65 巻 4 号，2017，pp.42-45
③ 石田　智巳，体育における実践記録の展開，体育科教育，査読無，63 巻 10 号，2015，pp.74-77
④ 石田　智巳，体育における実践記録の登場 2，体育科教育，査読無，63 巻 9 号，2015，pp.58-61
⑤ 石田　智巳，体育における実践記録の登場 1，体育科教育，査読無，63 巻 8 号，2015，pp.74-77
⑥ 石田　智巳，実践記録の戦後復興と体育界への批判，体育科教育，査読無，63 巻 7 号，2015，pp.58-61
⑦ 石田　智巳，体育同志会の研究課題と研究組織・体制づくり，運動文化研究，査読無，Vol.32，2015，pp.104-113
⑧ 石田　智巳,「わかる，できる，いきる」体育実践と教科内容研究実践，たのしい体育・スポーツ，査読無，No.290，2015，pp.30-33

〔学会発表〕（計 2 件）
① 石田　智巳　他，スポーツ権を視野に入れた教科論における教科内容と「観」の変革, 日本スポーツ教育学会　第 33 回大会，2016
② 石田　智巳, ナラティヴ・ プラクティスとしての体育の授業と実践記録，日本教科教育学会　第 41 回大会，2015

〔図書〕（計 2 件）
① 石田　智巳　他，スポーツの主人公を育てる体育･保健の授業づくり, 創文企画, 2018，212（44－47，147－153）
② 石田　智巳　他，対話でつくる教科外体育　学校の体育・スポーツ活動を学び直す，学事出版，2017，176（111－123）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
石田　智巳（ISHIDA, Tomomi）
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：90314715